

親鸞聖人七十五回大遠忌滋賀組お待受法要

ご讃題 親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまゐらすべしと、よきひと(法然聖人)の仰せをかぶりて信ずるほかに別の子細なきなり、
(Ref『歎異抄第二条』註釈版聖典 P832)

一、はじめに

親鸞聖人七十五回大遠忌滋賀組お待受法要の記念講演は、八月二十九日専念寺様で営まれました。ご法話は新井俊一師(相愛大学名誉教授、浄土真宗本願寺派教師・輔教、ハワイ別院衆徒)をご講師にお迎えし、約一時間、師自ら半生を振り返って思い出話に触れつつ「私はなぜ浄土真宗に帰依するのか」のお心を判り易く御聞かせ戴いたことであります。

二、私はなぜ浄土真宗に帰依するのか

師は開口一番、皆さん「信心は、大丈夫ですか。」と切り出されました。信心は野球のボールのような形あるものではありませんから、「あの人は信心がないとか浅い」とか言い出すと、途端に人間のはからいの世界に入り込んでしまい、み教えから遠ざかることになってしまいます。

一方、信心を頂戴するというと、人は見ず知らずの人に対してでも家族と変わらぬ優しさを示すことができるのです。

信心そのものは形がないので見ることはできませんが、自然にその人の振る舞いに現れるものだとおっしゃったことであります。

次に師は、皆さん「二河白道にがびやくどう」のお話をご存知ですか、ご存知ですか」と繰り返しおっしゃいます。誰も応えないので、思わず私が「Yes」と応えると「サンキュウ」と答えが返ってきました。

その言葉に促がされる様に、師は「二河白道」(Ref『信文類』註釈版聖典 P223)のお話をイラスト宜しく黒板に図示してご説明になりました。

旅の途上で突如、群賊・悪獣に追いかけられた旅人の目の前に忽然として火の河・水の河が現れます。その中間には長さ百歩、幅四五寸の白道びやくどうが現れます。水の河は逆巻き北に向かって際限がなく、火の河は猛り狂って南に向かって際限がないのです。白道は水河の波浪と火河の火炎でとても通れそうにもありません。戻っても、立ち止まっても、行っても死を免れそうにもないというのでこれを三定死さんじょうしというのであります。

これは、丁度、私達の人生の姿そのものです。

そのとき、東岸より「決心してこの道を尋ねて行け」という人の声が聞こえます、西岸からは「汝、一心正念にしてただちに來たれ」との人の声が聞こえます。「行け」というお釈迦如来の勧めと「來たれ」という阿弥陀如来の招きに勇気づけられて思い切って白道を歩み出すとほどなくして西岸に辿りつきます。

白道は、阿弥陀如来のご本願の道であり、お念仏の道であります。

西岸に辿りついてみると「善友に出遇った」とあり、それは阿弥陀如来だというのですが、今生にありながら御本願のお導きに遇って既に西岸に到達していらっしゃる方々()も含まれると思われま。

師は、三十五歳の頃、ハワイにいらっしゃいました。それまでは自分の知性で人生を歩んでいると考えていたとおっしゃいます。

ところが、人生の挫折に出会って初めて「何と傲慢な私だろう」と自分を振り返ったと当時の日記に記していらっしゃいます。

実はその傲慢さの故に仏教センターに足が向き、そこで、師は宮地勸学にお会いになり、お育てに遇われたそうであります。

やがて、四十一歳(一九八二年)になって日本に帰国される時がやってきました。そのとき「日本に帰ったら遇うべき人を教えて下さい」と、宮地先生にお尋ねしたところ、花田正夫さん、榊原徳草さんと西元宗助さんのお三方の名前を挙げられました。帰国してお三方にお会いになり、何度もご法話をお聞きになったとのことでもあります。その三人の先生に共通するのは、池山栄吉先生の薫陶をうけていらっしゃるということでありました。ですから、私は池山栄吉先生の孫弟子になるということになりますとおっしゃったことでもありました。

さて、師は、浄土真宗に帰依した西欧人にその根拠を尋ねた結果を含めて浄土真宗の素晴らしさをご紹介になりました。

第一に、浄土真宗は、何といても、み教えが判りやすいからです。

ご讃題の「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまゐらさずべしと、よきひと(法然聖人)の仰せをかぶりて信ずるほかに別の子細なきなり。」で示されている通りだからです。「ただ念仏して阿彌陀如来のお救いに与る」ことに全く疑いがなくなることが信心だからです。

第二に、ホットするみ教えだからです。

キリスト教の伝統の中にある西欧人は浄土真宗のみ教えに遇うと、皆さんホットなさるそうでもあります。キリスト教では、善悪を峻別し、善を求めることを厳しく求めます。ところが、まじめに善を追及する人ほど、自分は善を追及することなどとても叶わないことを思い知らされるというのです。そんなとき、「善人なほもって往生をとぐ、いはんや悪人をや」(Ref『歎異抄第三条』註釈版聖典 P833)とか「弥陀の本願には老少・善悪の人をえらばれず、ただ信心を要とすべし、そのゆゑは、罪惡深重・煩惱熾盛しじょうの衆生をたすけんがための願にまします」(Ref『歎異抄第一

条』註釈版聖典 P831)という親鸞聖人の御言葉に出遇うと、例外なくホットされるというのです。

第三に、親鸞聖人は法を守る一点では厳しさを示された人だからです。

悪人の救いがあるからといって、それに決して甘えてはいけません。厳しさが親鸞聖人の魅力だということです。聖人のお手紙に頻出します。

第四に、生活の中で頂戴できるみ教えだからです。

浄土真宗は、困難な修行を求めるものではありません。自分の生活の中で、阿彌陀如来のご本願のおいわれに遇い、勧めの通りに念仏して仏にならせて戴くことでもあります。丁度、自分の身の丈にあったプラクティスを示して下さっているところが有難いことでもあります。

その道を親鸞聖人が見つけて私達に示して下さいました。阿彌陀如来は光明無量・寿命無量のお徳をお持ちですから七百五十年前に開かれたみ教えは、私の身上において証明できるところが大変素晴らしいことでもあります。南無阿彌陀仏。合掌

(考察)「二河白道にがびやくどう」のお話で「今生にありながら御本願のお導きにあつて既に西岸に到達していらっしゃる方々」というのは、西岸の善友が今生に還相の菩薩と現われて行者を導いて下さるお姿だと仰ぐことができます。行者(私)に信心が開けますと水火の煩惱に苛まれる自らの真の姿(機の実相)が明らかになります。白道はその中に開けた法の真実です。そのとき信心の行者の心は既に浄土に遊んでいますから身は二河白道の途上にありながら善友と心が通いあっています。行者を喚び続ける阿彌陀如来の「めざめよ」との勅命には、西岸の善友の励ましのお声も含まれていることと窺えます。合掌

秋のお彼岸のご法座 九月二十日から、正覚寺は二十四日(木)
正覚寺仏教壮年会例会 毎月第一日曜午後八時より
正覚寺仏教婦人会例会 毎月十六日午後七時より
著作編集兼発行元 りびんぐらいぶず編集室(浄土真宗本願寺派 正覚寺内)
〒五二〇 〇五〇 一 大津市北小松四五二番地 ☎&Fax 0七七 五九六 〇一六六
☎・✉ mhkatata@pluto.dti.ne.jp 使務 堅田玄宥